

中日評論

わが国をとりま
く国際環境がいよ
いよ高くなつて
きたところで、衝
撃的な出来事が相
次いだ一九七〇年
代も、きまよがり
よい最後となつた。新聞雑誌
やテレビ、ラジオでも、七〇年
代の回顧とか八〇年代の展望な
りをひとわりやっていたが、
いずれも中身の薄いものが多か
つた。実際、七〇年代をどのよ
うに定義づけ、これからの八〇
年代をどのように見透(とあ)
すかは、きわめて難しい課題で
ある。それほとまで今日の時
代は不可測だといえよう。

私自身も「これまで、中国の
将来や国際社会の方向をひとか
に確信をもつて見透してきた」
も、あるいは中ソ関係の将来に
ついては、見透しはなかなか難
しくなってきた。そのような難
きにこそ、私たちは、歴史の教
訓を重視すべきではないか。

そこで現代史をふりかえつて
みると、いずれも各年代末に
は、次の年代を規定した重要な
出来事が起こっていることに気
がつく。第二次世界大戦以前に
ついても、一九三九年は独ソ不
可侵条約と第二次世界大戦の勃
発(はつ)つ、一九一九年は世界

恐慌、一九一九年は第一次大戦
の終結と中国の五四運動といつ
た具合に潮(さか)のぼれば、こ
れらの年代末がいかに重要な歴
史の転換点であったかが一目瞭
然(りやう)然(ぜん)する。しかし、
ここでは戦前のことばさお
いて、戦後史を考へてみよう。
まず一九四〇年代末、それは
四九年のヨーロッパにおけるN
ATO(北大西洋条約機構)の
成立、アジアにおける中華人民
共和国の出現に見られるよう
に、戦後世界秩序を揺動したヤ
ルタ・ポツダム体制(采英)の
戦勝三大国による世界支配体
制(せい)がいちばやく解体しはじ
め、同時に資本主義世界体制と
社会主義世界体制の対立が激化
したことを物語つた。こう
して中ソ友好同盟条約と朝鮮戦
争に始まる一九五〇年代は、東
西冷戦の時代となつたが、この
西冷戦の時代となつたが、この

偶然といえぬ転換点

現代史と年代末

中嶋 嶺雄
なかじま ねお



〇年代末になると、東西冷戦の
時代も内部的に大きく変化した。
東側は、はやくも五八年の
台湾海峡の危機前後の中ソ軍事
戦略競争を経て対立を深め、翌
五九年には中ソ新軍事協定さえ
破棄された。この年秋の中印国
境紛争では、さうした中ソ対立
が外部からも見えはじめたので
ある。半面、同じ五九年秋のキ
ヤーン・アヒッド会談に象徴
されるように、米ソ両大國は東
西冷戦から平和共存体制へと大
きく移行し、こうした開眼を疑
って台頭したドイツのフラン
スは、経済復興を遂げた西独と
ともにEECを形成してヨーロ
ッパの復興をばかろうと起こ
つたり、五八、五九年起こつ
た出来事は、国際政治の多極化
時代としての一九六〇年代をは
やくも規定したのである。

それからさらに十年、六〇年
代末には何が起こつたか、六八
年のジョンソン米大統領による
ベトナム北爆撃止命は六九年
のニクソン米大統領によるグ
ラム大会によって文化大革命を
一応收拾した中国は、外部世界
に再び対応する余裕をもちはじ
めたが、そのような中国を封じ
込めるためにこそ、ソ連は六九
年に「アジア集団安保」構想を
打ち出し、中国は「これを「覇権
主義」と見做(な)して、「覇権
冷戦争が本格的に激化していつ
か日本が六〇年代の経済成長
を背景に好むと好まざるにか
かわらず大きな国際的影響力を
もちはじめたことを確認させた
のは、六九年の佐藤ニクソン
ドシナ半島の流動化など、いず
れも重大なきまきまな出来事が
生じ、一九八〇年代を新しい冷
戦としての「生ぬるい戦争」
(Cool War)の時代として
規定してゆかかねない書行きて
ある。そうしたなかで、米日中
の「反覇権」連合への衝動とそ
れに対抗するソ連の軍事戦略の
拡大は八〇年代初頭の大きな国
際的潮流になろうとしている。
このように見ると、ほぼ
十年開で現代史の転換がいず
れも年代末に生じていること
は、もはやたんなる偶然とはい
えないであろう。十年という時
間は、新しい国際環境が形成さ
れ、やがてそこに問題が生じて
変化しないは破局を迎えるまで
に要する「時間的成熟」の期間
として必要十分な条件なのであ
らう。

だとすれば、やがて八〇年代
末には、中国と西側諸國との関
係の冷却化そして中ソ和解とい
う事態になるかも知れず、中国
の今日の内政上の大きな変化
は、一方でその上のような蓋(か)
ひ、然性を示唆している。いず
れにせよ、日中平和友好条約が
一つの大きな起点となつた七
八、七九年の一連の出来事を通
じて、一九八〇年代はもう一つ
くに始まっていることを忘れて
はなるまい。

(東京外情大教授)